

## 自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制 

育英大学教務委員会
-----------

(責任者名) 根本 想
(役職名) 教務部長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	本プログラムを構成する「情報処理法」「情報活用法」「統計分析法」はいずれも卒業必修科目として設定されており、対象学生は全員履修することとなっている。そのため、履修率は原則として100%であり、プログラムの修得に向けた基盤は確実に担保されている。各科目においては、課題提出やレポート等を通じて到達度を評価しており、一定の基準を満たした学生に対して単位認定を行っている。以上より、本プログラムは全学生に対して確実に提供され、適切に履修・修得されていると評価できる。
学修成果	本プログラムを通じて、学生は情報機器の基本操作やICTの活用方法を修得するとともに、必要な情報を主体的に収集・整理し、適切に表現・発信する力を身に付けている。さらに、統計分析法により、データを客観的に読み取り、根拠に基づいて判断する基礎的な力が養われている。加えて、情報倫理や情報セキュリティに関する理解も深まり、情報社会において責任ある行動をとるための態度が形成されている。以上より、数理・データサイエンス・AIの基礎的素養が総合的に身に付いていると評価できる。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	学生アンケートの結果から、本プログラムにおける授業内容については概ね高い理解が得られていることが確認されている。特に、情報処理法における基本的なICT操作や、情報活用法における情報収集・整理・発信の技能については、多くの学生が理解し、実践できていると回答している。一方で、統計分析法における確率や推定、検定といった数理的内容については、理解に差が見られる傾向も確認されている。今後は、基礎的内容の補強や段階的な指導の充実を図ることで、さらなる理解の向上が求められる。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	学生アンケートの結果から、本プログラムに対する後輩等への推奨度は概ね高い水準にあることが確認されている。特に、情報機器の操作やレポート作成、プレゼンテーションなど、大学生活や将来の職業に直結する実践的な内容に対して有用性を感じている学生が多く、他の学生にも履修を勧めたいという意見が多く見られる。一方で、統計分析法については難易度の高さを指摘する声も一部にあるが、基礎的なデータ理解の重要性は認識されており、総合的には推奨意欲は高いと評価できる。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本プログラムを構成する3科目はいずれも卒業必修科目として位置付けられているため、全学的な履修者数および履修率は安定して高い水準で推移している。履修率向上に向けた特別な施策を講じる必要は現時点では少ないが、引き続き初年次教育の中で本プログラムの意義を明確に伝えるとともに、各授業における到達度の可視化や学修支援の充実を図っている。今後も全学生が確実に履修・修得できる体制を維持しつつ、理解度の向上に重点を置いた改善を継続していく。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
<p>教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価</p>	<p>本プログラム修了者は、教育・保育分野を中心に多様な進路に進んでおり、現場においてICTを活用した授業実践や業務の効率化に寄与している。特に、情報機器の基本操作やデータの整理・活用に関する能力は、実務に直結する基礎的スキルとして評価されている。また、情報倫理や情報セキュリティに関する理解も、教育現場において適切な指導を行う上で重要な資質として認識されている。企業や実習先からは、情報活用能力を備えた人材として一定の評価を得ており、今後も社会の要請に応じた能力育成が求められる。</p>
<p>産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見</p>	<p>産業界からは、ICTの基礎的的操作に加え、情報を主体的に収集・分析し、課題解決に結び付ける力の重要性が指摘されている。また、生成AIをはじめとする新たな技術の活用能力や、情報倫理・セキュリティに関する理解も強く求められている。本プログラムはこれらの基礎的素養の育成に資する内容となっているが、今後はより実践的な課題設定やデータ活用の場面を取り入れることにより、社会の変化に対応できる力を一層高めていく必要がある。</p>
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p>本プログラムでは、身近な情報機器の活用や日常生活に関わるデータを題材とすることで、数理・データサイエンス・AIを学ぶ楽しさと意義を実感できるよう工夫している。情報処理法や情報活用法では、レポート作成やプレゼンテーション、情報探索など実践的な活動を通して、学びが生活や将来に直結することを理解させている。さらに、統計分析法では、データに基づいて物事を捉える視点を養い、根拠をもって判断することの重要性を体験的に学ばせている。これらを通じて、学ぶことの有用性と興味関心の喚起を図っている。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>本プログラムでは、内容・水準を維持しつつ、学生にとって分かりやすい授業となるよう工夫している。具体的には、基礎的な内容から段階的に学習を進める構成とし、演習や課題を通して理解を定着させている。また、実生活や教育現場に関連する具体例を取り入れることで、抽象的な概念の理解を促進している。さらに、課題に対するフィードバックや振り返りの機会を設けることで、個々の理解状況に応じた学修支援を行っている。今後も、学生の理解度を踏まえた授業改善を継続し、より効果的な学修環境の構築を目指す。</p>